荒神橋事件・万博・都市科学研究所

── 上田篤氏に聞く ──

今　西　　一

はじめに

上田篤氏は，周知のように日本建築学の第一人者である。インタビューにも同席してくださった京都精華大学教授の田中充子氏の「評伝・上田篤」（『日本文化研究所』00-10（No-67），以下田中論文からの引用）に，その生涯と業績が簡潔に紹介されている。業績の部分だけをかいつまんで紹介すると，建設省時代に住宅局に所属していた上田氏は，「新住宅市街開発法案」ほか2法案を成立させ，千里，多摩，泉北，京阪奈などのニュータウンの開発の責任者になった。そこで政治家が土地をめぐって暗躍する姿を見て，「政治は土地問題から始まる」という一文を雑誌『日本』に発表し，当時の一橋大学教授の都留重人氏（故人）から絶賛をあびている。日本の土地問題への先駆的な問題提起である。

その後，1965年に京都大学に戻り，建設省の開発主義を批判して，京都の町家（まちや）に目を付けて，『町家研究　全3巻』（鹿島出版会，1975-78年）をまとめ，町家が生産，住居，祭祀，文化をもった「世界にも稀な都市住居であることを」明らかにした。また，町内（ちょうない）を「義理の共同体」としたことは，社会学者や人類学者にも大きな影響をあたえた。そのエッセンスをまとめた『流民と都市のすまい』（1985年，駸々堂出版）は，毎日出版文化賞を受賞している。

ところが，1970年前後の学園闘争で，「新左翼の学生の要求するところには，心情的に共鳴するところがあります」と言って，直接の教授であった西山卯三氏（故人）と対立し，建物の封鎖を解除させられた全共闘（全学共闘会議）の学生の再入校を阻止する「門番」に立つことを，西山氏から命じら

れたが拒否した。その頃から西山氏との関係が悪化してゆき，数年後には京都大学を去ることになる。上田氏と西山氏との関係は，インタビューにもあるように古く，1950 年代の学生運動時代からのものであるが，特に大阪万博の裏話は興味深いものがある。

1978 年，大阪大学に移った上田氏は，大阪の町を何日も歩き回り，「大阪は漁村だ」と体感したそうである。当時まだ無名であった安藤忠雄氏ら多くの建築家を集めて，「中之島第三の道」「生國魂神社界隈」「橋づくし恋の道ゆき」などの展覧会を実行した。さらに「ウォーターフロント 2001」展などを行い，ウォーターフロント・ブームの先駆者となった。そこで『水網都市』（学芸出版社，1987 年）を始め何冊もウォーターフロントに関する著書を出版し，その集大成が『日本の都市は海からつくられた』（中央公論社，1996 年）である。また大阪 21 世紀協会の企画委員として，御堂筋パレードを実施して「芸能の町・大阪の原点」と位置づけた。

しかし，大阪大学時代の上田氏は，京大「紛争」の後遺症もあって，病気がちになり，しばしば入院した。そこで「新しい建築教育を試みて欲しい」という京都精華大学の誘いを断りきれず，1987 年に 4 度目の職場移転を行った。京都精華大学時代には，「橋の博物館」（1989 年，岡山，朝日デザイン賞）など多くのミュージアムの建設設計を手がけ，同時に多数の著書を出版したが，代表作は『五重塔はなぜ倒れないか』（新潮社，1996 年）である。民家研究とならぶ古建築の研究である。そして鎮守の森にも注目し，環境賞を受賞した『鎮守の森』（鹿島出版会，1989 年）を始め，鎮守の森に関する多くの著書を書いている。

しかし，上田氏の著書で最も多いのは都市論である。『日本都市論』（三一書房，1968 年）では，日本の都市と西欧の都市が違った原理でできていることを説き，『ユーザーの都市』（学陽書房，1979 年）では，自然と人間が共存する「中自然」の重要性を主張して注目を集めた。

大阪万博会場の設計をはじめ，都市デザインの面でも活躍し，上田氏自身は自分の究極の専攻は，「生活空間学」だと言っている。そのうえ考古学から

歴史学にまで発言を広げ，最近では西郷隆盛論まで展開している。京都大学経済研究所の兼任助教授の時代には，早くから「文化経済学」を提唱し，京都大学人文科学研究所の客員教授も勤めた。まさに「マルチ」としかいいようのない活躍である。

私は何冊か氏の著書を愛読していたが，是非とも，お会いしたいと思ったのは，『都市と日本人』（岩波新書，2003 年）の「あとがき」の次の一文に接した時である。上田氏は，1950 年代の学生時代を回顧して ――

> その破防法反対闘争，つづく「火炎瓶闘争」はむちゃくちゃだった。しかし，わたしにとって一番ショックだったのは，そのあとの毛沢東の農民蜂起を真似た「山村工作隊」のために農村に入りこんだときでのことだ。当時，わたしも含めて学生運動をやった多くの学生は「官憲の弾圧」には屈しなかったものの，土深い山村の貧しい人々に話しかけても一顧だにされず，血の通った交流など何もおこらなかったことに深い衝撃を受けた。
>
> そのショックをひきずって，そのあとわたしたちは政治運動を止め，学生らしく身近な「学園復興会議」を開催したとき，ふたたび一部勢力が「実力行動」を起こしたため，平和な学生運動は解体してしまった。わたしたちは傷心のまま社会に出た。

この「一部勢力」の「実力行動」とは，歴史学者松浦玲氏を「放学」に追い込んだ 1953 年 11 月 11 日の荒神橋（こうじんばし）事件である。私が，「京大天皇事件前後 ―― 小畑哲雄氏に聞く ――」小樽商科大学『人文研究』第 120 輯，2010 年）の「はじめに」で，荒神橋事件のことを書いた時に抱いた疑問は，なぜ学園復興会議は同志社大学で成功裏に終わっているのに，松浦氏らは京大の法経第 1 教室を使わせろと集会を開いていたのか，という点である。そのうえ東京から「わだつみの像」を運んできた立命館大学の行進に合流するため，無届けのデモを行って，荒神橋で警官と衝突し，橋が壊れて重傷 7 名，軽症 3 名の被害をだした。この二つの集会の意味が，正直よくわからなかった。しかし，

荒神橋事件が，「一部勢力」の「実力行動」であったとすれば理解できる。

上田氏と会った翌日，松浦玲氏に会って確認したところ，松浦氏らの行動を指導したのは，当時の京大の共産党細胞長の荒木和夫氏（のちの三一書房社長，故人）であり，むしろ全学連の仕事で東京に行っていた米田豊昭氏（故人）は，京都に帰ってきて，「荒木に任せたのは間違いだった」と松浦氏に語ったそうである。松浦氏の話では，大学当局は荒神橋事件に関係した小野一郎同学会委員長（立命館大学名誉教授，故人）ら全員を「放学」にする予定であったが，松浦氏以外は経済学部の学生で，経済学部の教授たちは強く反対したので，「無期停学」に終ったそうである。文学部の教授の原随園氏（西洋史，京大名誉教授，故人）が，処分会議に欠席したため松浦氏の「放学」処分が決定したそうである。原氏は，その後，松浦氏に「何とかする」と言っていたそうであるが，いまだに何ともしてもらっていないそうである。ただし，荒神橋事件を，軍事組織Ｙの挑発とする上田氏の見解に対しては，「無期停学」処分を受けた板東慧氏（経済学者，労働問題研究所所長）は反対で，板東氏へのインタビューは，後日掲載したいと考えている。

上田氏へのインタビューは，2011 年 3 月 23 日，京都駅八条口の京阪ホテルの喫茶室で行い，上田氏，田中氏，私の他に北大スラブ研究センター研究員の井潤裕氏が同席した。本稿のテープ起こしには，井潤氏のご助力を得たので，記して感謝したい。

上田篤氏インタビュー

今西　一　「先生に，1950 年代の学生運動の頃のお話を伺いできたらと思うんですけど…，先生，この後藤正治さんの『私だけの勲章』（岩波書店，2005 年）という本はご存知ですか？」

上田　篤　「いや，知りません」

今西　「そうですか。これは都市科学研究所の倒産問題を米田豊昭さんからルポしたものですが…」

上田 「誰がですか？」

今西 「今は，神戸夙川学院大学の学長になっておられるんですけど，京大を出てルポライターをやっている人なんですけど。もしよかったら差し上げますよ」

上田 「有難うございます」

今西 「内容は，1983 年の都市科学研究所の倒産問題を，ルポした本なんですけど」

上田 「私の名前は出てきます？」

今西 「もちろん出てきます」

上田 「でしょうね。私がつくったんですから」

今西 「ええ」

上田 「かつての仲間の何人かがやってきて，米田が行き場がないから何とか助けてくれって言うもんですから，こういうものをつくったですけど，色々問題が起こって…。そうですか」

今西 「米田豊昭さんとか榎並公雄さん（故人）とかが中心で」

上田 「榎並も入れました。…じゃあ，この本はいただいてよろしいのですか？」

今西 「もちろん，どうぞ」

上田 「有難うございます。今西さんは京大のご卒業ですか？」

今西 「ええ，農学部で研修生をしていました」

上田 「紛争の頃ですか」

今西 「大学は龍谷大学なんです。大学院の研修生が農学部で。紛争は龍大の頃にやっていたんです（笑）。京大はそのあとです」

上田 「じゃあ，京大の農学部の運動が壊滅した後ですね？」

今西 「そうですね。農学部の紛争は直接関係していません」

1　生い立ちと京都大学時代

今西　「まあ順番にお伺いしていった方がいいだろうと思うんですけど,先生のお生まれは 1930 年 8 月 12 日，大阪ですか？」

上田　「ここに一応，まとめたものがあるんですよ（「私の社会主義」)。差し上げますが，さっき言った私の運動の経歴が全部出ているんです」

今西　「これはどこに発表されたんですか？」

上田　「『雑家』という私が個人的に出していた雑誌です。阪神大震災が起きた後，マスコミが私の原稿をボツにしてから以後，怒りのあまり，こういう同人雑誌を出したんです」

今西　「そうなんですか」

上田　「この雑誌は 6 年半くらい出し続けました。最初は 1995 年というから平成 7 年」

今西　「これは 98 年 2 月号ですね」

上田　「そうですね」

今西　「大阪のどの辺のお生まれですか？」

上田　「生まれは大阪の病院でして。私の父親は当時，満州の奉天に商社マンとしていっていて，母親が私を産むために日本に帰ってきた。生まれた場所の住所は放出（はなてん）というところです」

今西　「ハナテン」

上田　「「ものを放つ」という字を書く放です」

今西　「それで，お父さんのお名前は何と？」

上田　「忠太郎です。忠義の忠と太郎」

今西　「お母さんは？」

上田　「母は茂です。草が茂るという」

今西　「ご出身はどちらです？　もともとは大阪ですか？」

上田　「滋賀県の彦根です」

今西　「それからはずっと大阪育ちなんですか？」

上田 「生まれてすぐ満州に行って 15 歳で終戦を迎えるまで満州の奉天と北支の濰縣という小さな町，そして青島（ちんとう）です。父親の仕事の関係で敗戦後引き揚げてきたんです」

今西 「ええ。で，高校は高津高校ですか」

上田 「青島ビールの青島中学からはじまって，そこで終戦を迎えて。それから彦根中学，高津中学，高津高校」

今西 「ああ，中学は彦根なんですか？」

上田 「そうです。だから，1 年，2 年は青島中学。3 年は彦根中学。4 年は高津中学と転々としてます」

今西 「大学へ入られたのが，50 年ですね。このころはまだ教養は？」

上田 「ありました。我々が宇治校舎の 1 期生です」

今西 「50 年の時はまだ宇治校舎ですね。50 年～51 年の時は宇治におられたんですか？」

上田 「50 年と 51 年の前半がそうですね。宇治です。それで，後半から専門課程に入りましたから」

今西 「京大も 49 年くらいから学生運動が，看護学校事件とか起こってきます。それで，50 年くらいにストライキをやりますよね？」

上田 「私は 50 年 4 月に京大に入っていますが，50 年は何もなかったように思います」

今西 「6 月に大山郁夫さんが参議院選に出て，学生が大山選に参加していますし，それから 3 月にスト決起大会があって 15,000 人くらいが集まって，ストライキをやるという…」

上田 「私はその時には学生運動には参加していません。じつは腸チフスに罹って 50 年の夏から 51 年の春まで 8 カ月ほど入院していたからです」

今西 「そうですか」

上田 「確か大山さんの参議院選の問題がありましたね」

今西 「高津の頃の，高校時代にも運動をやっておられるんですね」

上田 「それもパンフに書いてあります。当時，レッド・パージの運動があり

ました。それに我慢がならなった私は，生徒会の副会長をしていたので逆に学内にいた右翼の先生を問題にして，反レッド・パージ運動を起こしました。生徒何十人と学内を練り歩いたりしました。これは大阪で有名な事件になりました。新聞にも『高津高校赤化される』と書かれました。しかし結局，右翼の先生が辞めました。私たちは勝ったのです。この時，たぶん，全国にこんなケースはなかったんじゃないかと思います。しかし私は政治運動をやりたくてやったんじゃない。戦争に反対した人がパージされるのは赦せなかった，というだけです。で，それから大学に進んだけれども，学生運動をする気は全くなかった。政治はもう金輪際イヤだというのが当時の私の心境です」

今西 「では，50 年の学生運動はあまり参加しておられないんですか？」

上田 「50 年はやってないです。51 年からです。入院していましたから。当時私は，学生運動をする気は全くなかった。で 1 年間は平和に過ごしましたが，半分以上はいまいいましたように病気でした」

今西 「朝鮮戦争が起きたのは 50 年 6 月ですよね」

上田 「それからすぐに病気になりましたから一切関わっていない。昭和 26 年に，安保と日米行政協定反対のデモに参加したのが私の京大での学生運動の始まりです」

今西 「なるほど」

上田 「1 年生の 3 月に病気が治って，4 月に復学して，両条約反対闘争は 9 月か 10 月だったと思います。それが大学における学生運動の最初です」

今西 「じゃあ，50 年の秋におこった前進座事件などには」

上田 「参加していません。半年くらい入院して，隔離されていましたから。それから 2 カ月くらい自宅で療養して。原因は腸チフスの予防注射を打ったからです。今なら大問題になってます」

今西 「そうでしょうね」

上田 「予防注射で腸チフスになっちゃった（笑）」

今西 「菌を入れますからね。それはもう医療ミスですよね。安全保障条約と日米行政協定の反対デモに参加されたわけですね」

上田 「ええ」

今西 「で，翌年の 51 年の 11 月 12 日の天皇事件には」

上田 「私の写真がアサヒグラフに出ちゃったんです。それで親戚からえらく非難されました。大きくデカデカと顔が出まして」

今西 「その時は，お父様はまだお仕事をなさっていたんですか？」

上田 「そうです」

今西 「どういうお仕事を？」

上田 「繊維関係でした」

今西 「天皇事件に参加されたのはどういう経緯ですか。もう共産党とか，そういうものに関係しておられたんですか？」

上田 「いや，先にもいいました両条約反対デモに参加したのがきっかけです。 9 月か 10 月に。天皇事件の時はまだ一学生であった。で，天皇事件で，同学会から往きの旅費だけもらって私は東京へ 2 カ月近くビラをまきに行ったんです。で，東京でいろいろなことを知った。関西では信じられないことだったが，東京の学生運動にはいろいろな派閥がある，…全学連すら二つある。国際派と呼ばれる連中と，主流派の再建全学連と。私はその両方に会いにいった。私学はどうかというと，早稲田大学は…あらゆる活動団体の組織があってビックリした。慶應や津田塾，立教などもまわりましたが，ここは主流派が押さえていました。 2 カ月くらいの間，ビックリの連続でした。学生運動っていってもいろいろ派閥があると。そういうことを経験して帰ってから総括してやっているうちに，ますます深みに入りました。51 年の冬です。暮れの 12 月くらいですね」

今西 「武井昭夫さん（評論家，故人）を中心とした，いわゆる東大の国際派全学連のグループですね」

上田 「安東仁兵衛さん（職業革命家，故人）もいました。都学連が再建全学連を称し，伝（つとう）さんが委員長でいました」

今西 「ええ，名前だけはよく」

上田 「彼と一緒に二カ月近く歩き回ったんです。結果から考えると，国際派

潰しのために主流派に利用されたのかもしれません」

今西　「そうですか。早稲田は神山派から色々なグループが四分五裂でしたね」

上田　「ええ，四分五裂でしたね早稲田は。われわれ田舎者にとっては(笑)。こんな問題があるとは知らなかった。関西は民青（民主青年団）というか共産党主流派一辺倒でしたから」

今西　「当時の関西は主流派ですよね。主流派の拠点ですから」

上田　「そうです。ずっと一貫して」

今西　「だから国際派はものすごく少数派でしょ」

上田　「ほとんど表に出なかったですね」

今西　「ああ，出てなかったですか」

上田　「僕は知らなかった」

今西　「小松左京（実）さん（作家，故人）なんかはお友達でしょう。小松さんは国際派ですね」

上田　「あとから聞いたんだけどね。彼もあれもあやふやな男ですが（笑)。本当は僕らの時にも一緒にいた。体が大きかったもんだから，京大名物の『壁』という大きなプラカードがあって，それを持っていつもデモの先頭に立っていた。三畳敷きくらいの大きなプラカードです。それを５～６人でかつぐんだけど，体の大きいヤツがやる。小松はいつもその役をやっていたから主流派でもあったでしょう。あれもいろいろ付き合いがいいから（笑)」

今西　「主流派でもあったんですか。でも，小松さんは数少ない国際派の一人ですよね？」

上田　「そうでしたか？　それはあとのことでしょう」

今西　「まあ，でも京都は国際派はごく少数派ですね」

上田　「僕が知っているのは工学部機械工学の佐藤進です。国際派です。のち教授になります。高校の先輩で，のち交流がありました」

今西　「先生はご存知ですか，経済の重田澄雄さん（静岡大学名誉教授)。彼が最後の国際派ですね」

上田 「ああ，重田ね。知ってます」

今西 「重田さんともお会いして，国際派の話いろいろを聞きました。国際派は天皇事件には冷たかった。今さら天皇なんかを問題にしてという感じで見ていたようですけど。この時は本当にもう，一学生として傍観していたそうです」

上田 「そうですか。そういう情報はあまり入ってこなかった。隠していたんですね。わたしは両条約反対運動の時に民青に入りました。その時に一緒に入ったのは板東慧です」

今西 「ああ，板東慧さん」

上田 「板東と大島渚（映画監督）も一緒だった。三人とも一緒に入りました民青に」

今西 「民主青年団，ですか？　当時は。民青同盟の前ですね」

上田 「民主青年団です。板東と大島とはその後も一緒に運動しましたからね。なぜか三人一緒で。未だに覚えているのは，会議が始まってすぐ大島が『創造座の会議があって出なければなりませんから』って出て行った。アイツはいつも忙しい男だった」

2　火炎瓶闘争と山村工作隊

今西 「50 年に共産党が分裂して，51 年くらいから軍事行動ですね，いわゆる火焔瓶闘争とか代議士の水谷長三郎宅襲撃事件とかを起こしていますよね。この時にはもう，先生は山村工作隊にいかれていたのですか」

上田 「その時はまだです。共産党の一兵卒なんです。しかしやがて，京都中の火焔瓶をつくらされた。僕は工学部ですからね(笑)。火焔瓶をつくるのは，硫酸を薄めて希硫酸にして，ガソリンと一緒にビールビンの中に入れる。そしてビールビンの細いところを，塩素酸カリに浸した新聞紙を巻くんです。それを全部，大学の薬を使って。ですから工学部には何人もの協力者がいました」

今西　「大学の薬を勝手に使って（笑）」

上田　「誰かが盗んだんです（笑）。僕は３年生の時にそれをつくった。その隊長が中堀和英。中堀がリーダーで僕ら兵隊の指揮官だった。まあ今から60年前の話です」

今西　「『球根栽培法』なんかは出ていたんですか？　それに基づいてつくられた？」

上田　「そういうのも出ていました。火炎瓶はのちに聞いたのですが，『モロトフのカクテル』といわれてた。当時のロシアのモロトフ外相が，考案したといわれてるんですけど，本当かどうか知りませんが簡単につくれた（笑）。だからヨーロッパで盛んに使われた。ただね，ビール瓶がなくなってしまって，しまいにはしょうがないから中堀が『ジュース瓶でやれ』と。でも，ジュース瓶でつくった火炎瓶は，後から聞いた話では投げても割れなかった。ダメだった。ビール瓶なら細い口と胴体の太いところの継ぎ目が割れて発火するんですけど，ジュース瓶はダメだと言われて怒られたことがある（笑）」

今西　「中堀さんは，卒業後はどこに行かれたんですか？」

上田　「独立してやってます」

今西　「で，丹波へ行かれたんですか？　山村工作隊として」

上田　「その後は，いまは美山町となっていますが，知井（ちい），平屋（ひらや）では，私と一緒に行った京大文学部二人の学生が捕まっちゃった。私一人が捕まらなかった。何故かというと，二人の隊は火炎瓶を投げたけれど，僕の隊は投げなかったからです。その時のリーダーが投げなかった，危険だと思って。偉い奴です。祇園祭の前の日か，前の前の日かです。警察車に向かって投げろという，…すごいですよ。しかし僕らの隊は７～８人いたんですけど，各大学から選ばれてお互いにわからないようにして」

今西　「それはＹなんですか，軍事組織の？」

上田　「のちのＹですね。そのころＹと言ったかどうか…。Ｙというのはもうちょっと後，その頃Ｙという言葉はなかったように思います，僕の記憶では」

今西　「同志社のＹをやっていた鈴木さんという，考古学の人にお会いしたの

ですがね」

上田 「そうですか。Ｙというのをいい出すのは，そのもう１年後だと思います，京大では小山が中心でしたね。これは後で言いますけれど彼が中心になって荒神橋事件をおこした…」

今西 「ああ，そうですか」

上田 「やったのはＹで，その責任者は小山です。薬学部でした。次にもうひとつあるんですよ」

今西 「まあ，順番に聞いていきますけど。で，丹波では山村工作隊としてどういう活動をされていたんですか」

上田 「丹波ではね，平屋村に共産党員がいて，それを頼って三人で入った。地域で若者を集めて文化活動をやる，地域を変えるのは文化活動から…」

今西 「紙芝居とか，幻灯とかそういうことをやるのですか」

上田 「そうです，そうです。そういうところからやる。しかし何もやらないうちに，２日目か３日目にやられた。二人は捕まっちゃった，警察が来て。張られていていたんでしょうね」

今西 「京大の学生は何人くらい入っていたんですか？」

上田 「それはわかりませんが，おそらく共産党員の三分の二は山村工作隊に参加しなかった。みんな逃げちゃった。なんだかんだと言って，いざとなると怖いですから」

今西 「そうですね（笑）。中岡哲郎さん（技術史家，大阪市大名誉教授）もそう語っておられました」

上田 「そうでしょう。おおかた逃げたんです，古くからいた連中は。やったのは新入党員が大部分です。だから丹波にどのくらい入ったか，誰も教えてくれない。誰がどこに入ったとかも教えてくれない。僕の感じでは，まあ２，30 人は入ったでしょうね」

3　京大細胞の再建と府学連

今西　「で，戻って来られて，学園復興会議ですか」

上田　「違います。帰ってから，もう無茶苦茶だったんですよ」

今西　「組織は壊滅状態に近い」

上田　「そうです，壊滅です。京都府委員会も，地区委員会も壊滅していたんです。それで府委員会のリーダーが直接工学部細胞に来ました。名前を言わなかったからわかりませんが，京都府ではカラテンと言って知る人ぞ知るアジテーターです。カラス天狗。これがすごいアジを打ちました。労働者なんですけどものすごい。そのアジに我々の細胞は乗りました。その中には後に教授になったのもいるんですがね，５～６人は『そうやなあ』ってことで煽られた，カラテンに。そこで，まず工学部自治会を再建しよう，ということになって，工学部のボス教授たちを指弾するビラをまいたんです。石原藤次郎（故人）という大変有名な，後に学長選挙に立候補して落ちましたが，要するに工学部のボスたちを攻撃するということをした。そういう運動をやって工学部に緊張が走って，自治会というものも再建されたんです。何回かビラをまいただけで学生の中から新たに何人かが参加してきて，それで自治会が再建されたんです。…その時，僕は工学部細胞のキャップをやっていたんですが，その後，京大全学の LC（細胞指導部）のキャップになったんです。それが 52 年の暮れですか。私の 3 回生の終わりのときです」

上田　「それで，53 年の春からどうしようか。ということで，結局，天皇事件で解散された同学会（全学自治会）を再建しようと。つまり平和運動です。火焔瓶闘争で工学部の人間のかなりの数が捕まって，先ほど申し上げたように壊滅状態。それをたまたま火炎瓶を投げなかった連中がいたもんだから（笑），再建ができたという変な話ですけど。それが認められて，次は京大全学の再建をやるってことになった。僕が同学会再建という運動方針を出して，全学支持のもとに，同学会再建がわりと簡単にできたんです。それも，火焔瓶闘争のあと，地区委員会も府委員会も壊滅状態で，上からの指導が行われ

なかったからです。大体，機関指導というものがない方がうまくいくものです」

上田 「そのあと 6 月ごろ米田豊昭から，彼は（共産党）府委員会に所属していたと思いますが，『お前も職革（職業革命家）になるか，府学連に出るかどちらか選べ』と言われたんですね…」

今西 「その同学会の再建ですが，2 月に準備会が発足して，5 月のメーデーで，同学会再建決議が出されて，6 月 12 日に同学会再建投票があって，4,600 票の支持が入っています。で，27 日に第 1 回代議員大会があって，再建ができたんです」

上田 「そうです。それを私は推進した。当時同学会の再建については，党員の一部に反対もあったんです。だけど，僕はやるべきだ，と思った。それも指導部が壊滅していたたからできたのです。『そんなに言うんならやれ』ってことで，やった。その件に関しては全く府委員会からも地区委員会からも意見なしだった」

今西 「カラテンは何も言わなかった」

上田 「もう来なかった。彼はもうよそに回ってて（笑）。私の全くの個人的な判断ですすめた。米田も後で協力してくれた。あとで米田が言ったのですが，上田が同学会を復興させてこのまま置いておくと権力者になるから，ということで，『お前は職業革命家になるか，府学連に行くかどっちかにせい』だったそうです。僕はもう学生運動を辞めるつもりでいたんだけれども（苦笑），そう言われてしょうがないから府学連に行ったんです」

上田 「で，府学連で何をやろうか，ということで，今度は全学連を再建しようということになった。全学連再建のために，まず，京都で学園復興会議をやろうとなった。その時の指導を受けたのは，関西委員会です。関西委員会から河野と三木と名乗る二人の男が来ました」

今西 「この時の同学会の委員長が大島渚さんで…」

上田 「大島は府学連の委員長です」

今西 「ああ，府学連の委員長ですね」

上田　「同学会は，小野かな？」

今西　「小野一郎さんですね」

上田　「大島はまだ大衆だったんだけど，強引に引っ張りだした」

今西　「ああ,…確かに小野さんが委員長ですね。この前お亡くなりになった」

上田　「そうですか」

今西　「で，府学連の委員長が大島さん」

上田　「私が『大島，お前ちょっと委員長やれ』って引っ張ってきたんです。大島は共産党には入ってなかった，民青どまりです(笑)。共産党員は決して表看板には出さない。弾圧されたとき犠牲になるのが困るから」

今西　「そうなんですか」

上田　「板東はそれまで府学連の委員をやっていたんだけれど,京大の同学会の中央執行委員になったんです。それで彼は後でパージされる」

今西　「へえ。…で，府学連が大島さんで，副委員長は池上惇さん(京大名誉教授）ですか」

上田　「違います。池上はもう１年あとの委員長です。書記長は安藤精一といって，これも同志社出身の一般大衆です。で，副委員長が習田美津男という立命館出身」

今西　「ええ，わかります」

4　学園復興会議と荒神橋事件

上田　「この府学連はわりとうまくいったんです。うまく意思統一して，全学連再建のために学園復興会議やろうといって，全国から 600 人ほど学生を京都に集めたんですが，でも僕らが成功だ，と思った途端に，Ｙの連中が『時計台に突っ込め』みたいな方針を出し，具体的には法経第一教室を実力占拠した…」

今西　「それが荒神橋に？」

上田　「つぎに荒神橋事件になるんです」

今西 「その前に，だけど内灘闘争とかMSA闘争とかを，やっておられますよね。7月頃にね」

上田 「あります，あります」

今西 「で，その時に内灘とかには行かれたんですか？」

上田 「僕は責任者でしたからそういう対外的なところには出ていかなかった。また我々の内部問題，自治会，同学会あるいは我々の勉強の環境を整えようとした。だからずっと右翼的だと見られていた。対外的に活動することは，もう山村工作でこりごりしたからね（笑）」

今西 「(笑)」

上田 「上からの命令だから仕方がないから適当に，それぞれにやれっ，とね。だから，やらなかったんです」

今西 「だけど，その学園復興会議には参加されておられるんですよね？」

上田 「それは，私が主催したから当然です。その時，味方になってくれたのは共産党の関西地区委員です。何回か指導してもらって。その時には京都府委員会も，地区委員会も壊滅状態でした」

今西 「そういう状態だったんですか。一部には国際派がいましたよね，作家の西口克巳さん（故人）とか，そういう人とは全然つながりがなかったんですか？」

上田 「ないですね」

今西 「京大を放学になった，共産党の専従職員の水口春喜さんなんかとは関係があったんですか？」

上田 「いや，ないです。水口は知っていましたが大人しい人です。そういう人が共産党の専従になる。上部機関の指導がない時には，もう勝手にというか，わりと楽しくやれるんだけれども，それが成功すると，あれこれ指導してくる。そしたらもう無茶苦茶になる」

今西 「いつでもそうです（笑）。大衆運動が盛り上がってきて，それから党員を引っ張って党の活動をさせようとするから，大衆運動がつぶれてくる。いつもの共産党の失敗例，典型ですよ」

上田　「いつでもそう（笑)。ただ，何遍もいうように，関西委員はわりと建設的，創造的だったんです。ビックリしたんです，僕も」

今西　「関西地方委員会はどういう人たちが？」

上田　「河野と三木といったと思います。三木の本名は井爪です」

今西　「関西地方委員会というと吉岡吉典さん（故人）たちですかね。で，学園復興会議をやろうという話になって，会場問題がまず出てきますよね」

上田　「ええ，学長が滝川幸辰でしたからね[1]。そこで京大のシンボルの法経第一でやろうといったんだけど，大学側が認めない。僕は法経第一を要求するかたわら，同志社大学の明徳館も借りたんですよ。だから法経第一を使えない時には明徳館でやると。しかし，最後の段階でダメだ，ということになって明徳館でやることになった。ところが，松浦玲とか荒木和夫が中心になって，法経第一実力占拠の方針が出たんです。たぶん命令を出したのは荒木です。僕のあとの京大細胞キャップでしたから，荒木に命令したのは府委員会でしょう。かわいそうに，松浦は突っ込まされた。荒木は，共産党の『幹部温存』の方針で表にでなかった。そして『やれ！』っちゅう方針で法経第一を実力占拠して，共産党の連中を中心に大会なるものを開いた。その連中がそのまま立命に，わだつみの像の行進とかがあったんだけど，我々のところに合流しようとして来た」

今西　「先生はその時,立命におられた？　法経第一の抗議行動には参加しておられないのですね？」

上田　「我々は，一生懸命，同志社と立命で学園復興会議をやってたんです。同志社の明徳館を主会場にし，立命の研心館をサブ会場にして，それと京大と三つ用意したんです。これは僕がやりました。安全弁のために。だから，今回の震災も『何だ？！』と言いたい。まったく有事を考えていない。ダメです。何の安全弁もないっちゅうのは。…まあ，これは後にしましょう(笑)。だから，三つ用意していた。何が起きるかわからないから。最悪，立命には末川博さん（元総長，故人）がいるから，絶対いけると」

今西　「東京からわだつみの像を，立命に持ってきていたんですよね」

上田 「実際には立命ではあまりやりたくなかったです。末川さんに迷惑がかかるしね。他でやりたかったんだけど。だから最後の懇親会場を立命館の研心館にしたんです。で，我々は明徳館でちゃんと第一日をやったんです。整然とやって，みんな立命館の懇親会へ移った。でも京大にいた連中は実力占拠をやったんです。松浦や荒木が，その連中が立命館に合流しようとしてきたんです。非合法デモだったから荒神橋で落っこちたんですよ。で，みんなは上田が仕組んだっていうんだけど（笑）」

今西 「そんなことないですよ（笑）。無理ですけどね。警官隊とぶつかったんですから」

上田 「みな京大の連中です。その時僕と大島らは，研心館の中で混乱状態になっていた。600 名の中に京大の連中が紛れ込んできて『今から街へ進撃してデモをやれ！』と。もともと京大にいた研心館の連中が，荒神橋で落っこちたのは，『非合法デモ』だからです」

今西 「そうですね」

上田 「わたしはそれまで。府学連主催のデモは全部許可をもらいました。だからわたしは絶対に非合法デモをやらない。しかしこれは届け出ていなかった。だから，警官隊ともみ合って橋から落ちたんです。落ちなかった連中がやってきて研心館の学生たちに非合法デモをやろうと言い出したんです」

今西 「京都市警に行くんでしょ？　そこでまた警官隊に殴られてけが人が出る」

上田 「そう，後になって一部はそうした。そういうことで，会場では大いに揉めて，大島が議長をやったらもう無茶苦茶になってしまって」

今西 「大島さんの不信任動議が出る」

上田 「あいつは喧嘩早いから無茶苦茶です。で，仕方がないのから，本来，表に出てはいけない共産党員で府学連の執行委員の私が仮議長になった。そしてマイクをつかんで『モシモシ皆さん』と言ったんです。会場の 600 人はビックリして大爆笑になった。私はそれまで表になど出たことがなく，いつも電話で指示ばかりしていたからついそのクセが出た。その時に三辺つまり

習田がですね，たまたまその時に日本史研究会の研究会が立命であったんです，林家辰三郎（歴史家，京大名誉教授，故人）とか奈良本辰也（歴史家，元立命館大学教授，故人）とか。その連中を呼んできて，奈良本タッチャンが，学生たちに『諸君，我々は歴史家として言う。本日，今夜は，決して革命前夜ではない』って言ったんです（笑）。有名な演説です。それでみんながシュンとなっちゃった」

今西 「(笑)」

上田 「それで解散しちゃった。まあ，一部は河原町に行きまして警官に殴られましたが。それで，その後，僕と同志社学友会の副委員長で同志社共産党のリーダーだった難波晃と共産党京都府委員会によばれて査問されたんです」

今西 「あ，そうですか」

上田 「僕はなぐられることを覚悟していった。しかしなぐられなかった。二人とも党活動停止処分です。以後処分解除の通知が来ないんですよ，いまだに（笑)。50 年以上経ちますけど」

今西 「それはもう，今さらです（笑)。解除されたって」

上田 「だから，私は何だろうか，と。そのとき難波はいい奴ですが『赤色帝国主義だ』といって怒っていた」

今西 「松浦玲さんは放学処分ですね」

上田 「松浦は同学会の中央執行委員で，かつ実力占拠した時計台法経第一での議長だったんです。で，放学になった。板東なんかも中央執行委員だったから１年間停学になった」

今西 「無期停学ですね」

上田 「無期停学だったが，１年で解除された」

今西 「ええ。大体１年で解除されるみたいです」

上田 「滝川幸辰は，府学連の私は法経第一闘争に参加しなかったからということと，府学連は学内組織ではないから大学は関知しないという妙な方針で，私と大島は処分を免れた。僕もやられると思ったんだけど。ひょっとして大

島の指導教官だった政治学の教授[2]，何といったか忘れましたが彼が滝川に頼みこんだのかもしれません」

今西 「…まあ，不幸中の幸いというか（笑）」

上田 「僕はただ，それまで何回も実力デモをやって，警官に追い回されたんだけれど，高校時代サッカーをやっていて足が速かったんで捕まらなかった。今でこそ有名だけど，当時の中学，高校ではほとんどサッカーなんて知られていない。だから，ともかく足は速かった。足のおかげで捕まらなかった。丸物百貨店の七階まで警官をふり切って一気にかけ上り女便所に隠れたり，祇園のお茶屋の通り庭の奥の蔵の影に身をひそめたりしました（笑）」

今西 「でも，荒神橋事件を見て嫌になられたんでしょう。その実力闘争主義が」

上田 「そんなことやっても革命なんてできっこないと思ったんです。僕は，…」

今西 「で，六全協（日本共産党第 6 回全国協議会）が 55 年にありますけど，その前に，もう共産党から離れられてる？」

上田 「もう離れていた。53 年 11 月から」

今西 「荒神橋事件は 11 月 11 日です」

上田 「先ほどいいましたように査問されて党活動停止です」

今西 「松浦さんの救援運動とか，裁判闘争なんかは」

上田 「全然。…大体，僕は松浦に『止めとけ』といったのにやったんですからね？　板東にも『やるな！』て言うてるのにね，『松浦が頑張っているから』とかって言ってね。で，板東も巻き添えを食ったんです。そのとき米田はわけのわからんことをいっていた。『壁を見て人を見ず』などといってわたしを批判した。でも，あの時の悪い奴は小山ではないですか？　京大の中で『やれ，やれ』と言っていたのは。米田はあの時，多分，地区委員会か府委員会にいたんです。上からの指令があったんでしょうね，多分。Ｙは小山ですが米田はＹじゃない」

今西 「榎並さんはＹだったでしょう？　そう証言する人がいるんですけど」

上田　「榎並は知りません。榎並は僕が工学部の細胞キャップをやっていた時には地区委員でした，間違いなく。その後，府委員までなっていたと思います」

今西　「軍事関係の統括は榎並さんがやっていたんですよ」

上田　「そうですか。じゃあ，その下で小山がやっっていたのかなあ？　僕に直接，査問したり文句を言ったりしたのは小山でした」

今西　「工学部の小山さん？」

上田　「薬学部の小山です」

5　京都と全学連

今西　「荒神橋事件の詳しい経過も，今日初めて聞いて。二つの集会という意味が理解できました」

上田　「そうですか。まあ，今さら小山に怨みを言ってもしょうがないけど。…大体，有名な連中というのは，実力行動というか，火炎瓶とか山村工作の時はみんな逃げました。山村工作というのは，たいてい新入りの真面目な連中がやらされた。前から前進座事件などやっていた連中はみな逃げちゃった。あるいは幹部になって後ろで糸を引いていた。僕の記憶では」

今西　「だけど，国民的科学運動なんかで，紙芝居や幻灯をもって村を回ったりした人たちも，いたわけでしょ」

上田　「それはいました。しかしたいていは共産党員ではない。シンパ(同調者）です」

今西　「国民的科学運動には参加されたのでしょう」

上田　「そういう文化活動はやっていません。政治活動ばかりです。工場にビラまきに行くとか。わたしが一時期警察から免除されたのは，火焔瓶を投げなかったからです。投げた連中はみな捕まった。警察はものすごく調べてますよ。だって，みんな捕まえて白状させたんだもの。だから芋づる式に捕まった。中岡哲郎なんかは投げなかったのでしょう。だから捕まってない。大体，

山村工作隊自体では捕まりません。何も実力行使をしたわけではないのですから。最後にはやらされたでしょうけれど，そこまで行かなかった」

今西 「そうですね。だから実力行動派は捕まってますけども，それ以外はわりと文化運動とかやっていた…」

上田 「だから捕まっていない」

今西 「文学部の黒田俊雄さん（中世史家，大阪大学名誉教授，故人）などは国民歴史学運動をやってましたけど」

上田 「前からやっている連中はよくわかってますから，言葉は悪いけど『これはやばいなあ』と思ったらやらない。何も知らない新しく来た連中はやらされてみんな捕まっちゃう。中には自殺したのもいましたから。金谷って可哀想な男でしたね。文学部の」

今西 「文学部ですか」

上田 「何か急に突如として左傾化した。高知から来た男でしたけど」

今西 「何を専門にされていた人ですか？　歴史ですか？」

上田 「文学です。すごい男ですよ。シャープで，体が大きくて。田舎から来たんです。はじめ，そういう思想闘争も何もなかったけど，見たり聞いたりしているうちにだんだん左翼になって，それで火炎瓶闘争に参加して，ものすごいリーダーになった。しかし捕まって，やっぱり仲間の名前を言ったか何かで出てきた時に共産党のＹの連中にぶん殴られて，さんざんヒドイ目にあった。それでとうとう自殺しました。ああいうのが何人かいます」

今西 「田舎から出てきた人が割と真面目にやってるんですね？　都会育ちの連中はそういう軍事行動にはあまり参加しない」

上田 「一般にはそうだったかもわからないですね。僕はそこまで詳しくは知りません。金谷の場合はそうですね…。米田は要領がいい。あんまり捕まっていない。投げてもいない。そういう意味ではみなは都会の男ですから。榎並はＹにいたのかなあ？」

今西 「榎並さんは軍事行動をやっていたという話がありますね。米田さんはだけど，全学連委員長だったんでしょ？」

上田 「全学連委員長にしたんです。はじめは玉井ってのがいてね」

今西 「玉井仁さん」

上田 「はじめ玉井仁を出して『全学連を再建せよ』ということでした。しかし全学連は国際派に牛耳られてもう玉井ではどうしようもならなくて，もう１回米田にいきましたね」

今西 「第５回の立命で開かれた全学連大会で，主流派による国際派へのリンチ事件が地下室で起こったんですけど，そのことはご存知ですか？」

上田 「その時には関係してません」

今西 「その時に，いわゆる武井派の，国際派の全学連から関西の主流派に移っていくわけですよね」

上田 「そうですね」

今西 「で，関西から委員長が出て，玉井さんから田中雄三さん（龍谷大学名誉教授）まで，ああいう人たちが出てくるんですけど，玉井さんは血のメーデー事件で追いかけられて，白鳥事件の犯人と間違えられて，北海道で捕まって，裁判を受けているんですよ（笑）」

上田 「そんなこともありましたね」

今西 「その後，しばらく北海道におられたみたいで」

上田 「あれもまあ，おとなしい男だったけどね。何か知らんけど『やれ，やれ』言われて，悪い奴じゃないですよ。東京に行っても何もできなかった。安東仁兵衛なんかが強いですから」

今西 「論客が多いですからね，東京はね。頭の回転の速さが違いますから」

上田 「ええ」

今西 「だけど，玉井さんは現在でもお元気らしいですけどね。東京の多摩の方の団地に住んでおられるらしいんですが。米田さんを委員長にしようというのは，先生ですか？」

上田 「玉井でうまくいかなかったから」

今西 「もちろん，だって白鳥事件で逮捕されてますからね，逃亡中の全学連委員長が（笑）」

上田 「それで代わりに米田を出した」

今西 「米田さん，浪高ですよね？　大阪ですよね？」

上田 「そうです」

今西 「浪高時代からの活動家でしょ？　彼は」

上田 「そうでしょう，たぶん」

6　建設省から京大へ

今西 「米田さんとは,その後もずっとお付き合いがあるわけですか？　都市科学研究所まで（笑)」

上田 「ここ（「私の社会主義」）に書いている通りです。私は党活動停止で，またどこも就職先がないから大学院に行きました。そのあと建設省に入った。ここは僕の前歴を知ったうえで採用してくれた。何のことはない，建設省は左翼だったんです。周りは全部，課長も含めて」

今西 「へえ」

上田 「だから承知の上で採ってくれた。僕は行ってからビックリしたんです。建設省という役所がこんなに左翼だったら，何も学生運動なんかやる必要はなかった（笑)」

今西 「官僚の方が（よほど）左翼だという（笑)」

上田 「そう。驚きでしたよ。大阪人が霞ヶ関の役所に入った例はほとんどなくて，それである係長が宮城（皇居）を全部公団住宅の団地にすべきだと私に言ったんです。『ほお，宮城は全部公団住宅か』と僕はビックリしました。そんな反天皇主義というか左翼というか，そんなのが係長で東大出のエリートだったです。『これは全く社会主義である。なんで私は革命運動なんかやってたか…』(笑)。そんなことでしたね」

今西 「(笑)」

上田 「それで，8年9カ月勤めて，京都大学へ帰ってから，ベトナム戦争が来たという，それでまた京大で学生とガタガタした」

今西 「京都大には呼び戻されたわけですか？」

上田 「そうです，京大の西山夘三という建築学科の教授が呼んだのです。実は僕が共産党の活動をしていた時に，彼も共産党の活動をしていました。ある時は私の方が上だったんですよ。京大細胞全体のキャップでしたから(笑)。僕がリードする立場だった」

今西 「学生がリーダーですか？」

上田 「そう，学生がリーダー。当時はそうなんです。教授連は嫌がってましてね。当たり前ですけど（笑)。先生が学生から指導されるんだから」

今西 「(笑)」

上田 「しかし，共産党というのはそういうところでしてね。インテリというものをほとんど認めない。労働者が中心です」

今西 「インテリ蔑視ですよね」

上田 「ものすごいインテリ蔑視。教授だろうが何だろうが，そんなのはプチブルというわけで，全部労働者が指導すべき。ですから労働者の次にはまだ学生の方がいい，という感じでした。だから，こちらが指導したら嫌がっていたんだけど。で，そういう関係で僕は西山さんのことを共産党を通じて知ったんですよ。全然，建築の先生ということを知らなかった」

今西 「ふうん」

上田 「それで，ある時，西山さんを講演会に呼んだ。人相の悪い人が来たから私服警官だと思って，『あんたどこの署ですか』って訊いたんです。そしたら『西山です』と（笑)。当時，学内に多かったんです，私服警官が」

今西 「スパイですね？」

上田 「しょっちゅうやられていたからてっきり私服やと思った（笑)」

今西 「まあ東大のポポロ事件とか，色々起こりましたからね」

上田 「その後，僕は大学院に行った時に『西山さんのゼミには入りたくない』って言ったら，友達の吉野正治（京都府立大学名誉教授，故人）が，これは共産党を名のって同学会の代議員選挙に出た男だけど，彼が『それはダメだ！』て怒られた。しょうがないから，西山さんのゼミに入ったのはいいん

だけど，大学院１年ですが，あんまりゼミがしょうもないから『ゼミ止めましょう』と先生に提案した。そしたら西山さんは喜んで『おお，止めよ止めよ！』って（笑）」

今西 「それは楽ですよね，教師は（笑）」

上田 「そういう人ですね。それで，僕は建設省に入った時，西山研出身ということもあって『西山さんがいつまでも助教授じゃいかん』と思い，京大の建築の卒業生たちに対して，西山さんと仲が悪かった棚橋諒（京大防災研究所初代所長，故人）という，建築の大ボス教授がいたんですけど，彼を日本建築学会の会長にしようという運動をはじめたんです。それを西山夘三氏に『棚橋さんを建築学会の会長にする』と東京の同窓会で言わせたんです。西山さんは東京に来るといつも車中でウイロウを買ってきて僕の家に泊まる。新婚早々でもずっと泊まる（笑）。女房は『またウイロウさんがきた』といっていた。建設省時代には，二カ月に一度くらいは泊まっていったんです。そのころホテルなんてなかったからです。それでいろいろ運動して棚橋と和解し，教授になった。その恩返しに私を京大へ呼んでくれたんです。助教授として」

今西 「ふうん」

上田 「しかし，その後またややこしくなった」

今西 「京大の中で？」

上田 「70 年安保の時です。全共闘，三派全学連などによる建築教室の封鎖の時です」

今西 「京大全共闘ですね」

上田 「西山さんは共産党ですから，当然，全共闘と対立します。私は中立だったんだけれども，中立の先生のところにはどうしたって全共闘系が集まってきちゃう。…で，私の教え子たちというのは，皆，全共闘に走っちゃって，それで結局，ガタガタ揉めて，僕を京大はなかなか教授にしてくれない。まあ嫌がらせだから，おれないことはないんだけども」

今西 「ご自分で？」

上田 「辞めました」

今西　「ずっと助教授ですよね」

上田　「その時には西山さんはもう辞めておられましたけどね。だけど，要するに私の学生が封鎖をやったという責任を問われまして。まあ何年かしたら教授になれたと思いますけど，嫌になって阪大に移ったんです。それから阪大に 7 ～ 8 年いて…」

今西　「78 年ですよね，阪大に移られたのは？」

上田　「そうです。紛争が終わってから後です。その間，まわりは西山さんが辞めたあと後任の教授になると思っていた。実際何回か教授会で事案にかけられたけど否決されたらしい。僕は知らなかった。何回かけても『上田はダメだ』という教授が 2 人いて， 5 ～ 6 年間，僕は棚晒しにされた」

今西　「まあ，京大は厳しいですからね」

上田　「そんなことはしょっちゅうです」

7　都市科学研究所と万博

今西　「その頃，米田さんたちと都市科学研究所をはじめられますよね？」

上田　「都市科学研究所は，京大に帰って教えるようになってからです。榎並や何んかに言われつくったんです。米田は堀川病院というところ，民診連というのがありましてね，当時医学部の連中はかなり左翼だったんで，医学部の連中が民診連に勤めていて…」

今西　「民医連ではないですか？　ミンシンレン？」

上田　「民診連と言いましたね，僕らは。民主診療所連合会…」

今西　「診療所の方ですか」

上田　「そうです。医学部ではなく診療所，病院です。その拠点が堀川病院でした。堀川病院の事務長を米田はしていた。ところが，堀川病院の院長が米田の言動に我慢がならなくなって，馘首にしちゃったんです。で，米田が失業した。そこで『何とかしてくれ』と榎並が言いにきたんです。僕も委託研究を受けたりするから，それの引き受け機関として，米田を代表にして最初

『計画学研究所』というものをつくったんです。当時，ロベルト・ユンクという哲学者がいいだした計画を科学化するということを考えに共鳴していたもんですから。で建設省の関係で委託研究を頼まれていたから，そこでやることにしたんです。そこに私の教え子も何人か入れた。そのうちに万博の問題が起きて，これはまたこれで，色々あるんですけど（笑）」

今西 「(笑)」

上田 「要するに，関西で万国博覧会をやろうということで，最初に言い出したのは梅棹忠夫さん（文化人類学者，故人）らのグループです。関西の経済界がそれにのって，国と折衝してそのままいっちゃった。それで，具体的に会場をどうするのかという話になって，その中心にいたのが先の石原藤次郎さんという土木の大ボス。建築のボスは棚橋さんです。石原さんが棚橋さんに『若手の助教授を入れて受け入れ対策を考えろ』という命令がきて，棚橋さんがそれを西山さんに言って，それで僕が会場計画の調査をやる委員会をつくらされた。ところが，わかったことは，東京の浅田孝（建築家，故人）という人がすでにやっていて，今，京都造形芸術大学にいる浅田彰の叔父さんなんですけど，これが丹下健三（建築家，東大名誉教授，故人）の弟弟子なんです」

今西 「はあ」

上田 「で，その時はもう，もう東京でシナリオができちゃってたんです。あれは通産省が主催ですから，やるとなった瞬間にそれはもうできていた。東大の高山栄華（東大名誉教授，故人）という教授が中心となって，全部取りしきり「オリンピックは丹下君にやらせたから万博は浅田君」ということになっていた。全部決まってた」

上田 「それで，やってみたら，周辺の道路計画，万博をつくると色々と道路計画が変わってくるので周辺の道路計画は全部京大の土木がやる。中の建築は東大と，もうはっきり決まっていた。それで『あきませんわ』と僕は西山さんに言うたんです」

今西 「それはそうですよね（笑）」

上田 「浅田さんは，僕は建設省時代からよく知っていたんです，じつは。その彼が挨拶に来たんです。建築の先生や西山さんのところに。でも，みんなそっぽ向いた。その時に大阪市と大阪府が出てきた。まだ万博の事務局長が決まっていなかったんです。大阪府市が実権を持っていた。『ともかく万博とは何か，わけがわからないから』と言って調査を依頼してきたんです。大学はどうしたらいいのかわからんから，僕に『調査しなさい』と言った。僕はその依頼を京大の建築学教室で受けることにした。建築学教室は外郭団体の依頼を受ける建築研究協会というのをつくっいて，村田治郎さん（京大名誉教授，故人）という建築史の先生を委員長にして受け入れる体制をつくっていた。そこで京大の土木の佐々木綱とか末石冨太郎とか何人かが入った。農学部の中村一とかを集めて委員会をつくって，受け入れ体制をつくった。そして調査報告の大部分を僕が書いちゃって，ごっついの出したんです」

上田 「そういうことで，京大の建築ですごい調査報告がでた，ということになった。それをもとに会場計画委員会が立ち上がった。で，誰を会場計画の原案作成者にするかという話になった時に，そのときはだいぶ薬が効いてきて『関西からも誰か出そう』という運動になったんです。関西の建築界が盛んにそれを主張したもんだから，大阪府市もその気になったんです。で，私にいろいろ相談がきたから西山さんを推した。その計画委員会で，高山栄華はもう浅田ではダメだ，と言うことになって，東京オリンピックに続いて丹下健三を再び出してきた。で，西山と丹下が両方出てきたんですよ」

今西 「東西の両巨頭ですね」

上田 「それで，市の連中が僕のところにどうしたらいいか，相談に来るから，『原案作成者を二人にしましょう』と言った。そういう点では，私はわりと妥協主義なんです（笑）」

今西 「無茶なことを（笑）」

上田 「それを，訳のわからん府市の連中が呑んじゃった。僕はできっこないと思ったけどね，二人で一枚の絵を描くなんてことはできっこない。ところが二人がやるってことになってしまった。万博の会場計画は西山・丹下でや

るということに決まっちゃったんです。委員長が高山栄華です。彼は役人のいう通りにやる」

上田 「こうしてともかく，決まっちゃったんです。何も知らん連中が決めたのはいいんですが，しかしそんなことできるわけがない(笑)。決まっちゃってから，新聞に発表されてから，みんな大騒ぎになっちゃったんです。どうするかとね？ …それで二進も三進もいかなくなって，有名な丹下・西山会談が行われたんです。丹下のところから出てきたのが磯崎新(建築家)。磯崎はもう一カ月くらい関西にいた。で，毎日二人で会って『どうしよう，どうしよう』(笑)。それでね，丹下･西山会談を設定しようということになった。東京の，できたばっかりの，ホテルニューオータニの最上階の特別室で西山さんと丹下さんが夜中の 12 時から会合をやった。どっちの日程も調整がつかないもんだから。夜中の 12 時から 2 時ごろまでやりましたね。それで立ち会ったのは，丹下・西山・磯崎と僕の 4 人だけです。それで 2 時間くらいやりました」

今西 「ふうん」

上田 「まあ色々な話をして，結局丹下さんの提案になっちゃったんですけど。つまり『西山先生，会場計画の前半をやって下さい。後半は私にやらせて下さい』って(笑)。『ただし，前半は西山先生がお好きなように絵を描いて下さい。その代わり，後半は西山先生の絵を 3 割だけ変更することをお許し下さい』と (笑)。ものすごい政治的でしょ。僕と磯崎はそれをしっかりと聞いておりましたから(笑)。丹下さんも西山さんも，もう両方死んじゃったけど，すごいですよ，丹下さんの政治力は。都市計画からマスタープランから全体を西山さんにお願いする。建築を含む最後の仕上げを私（＝丹下）がやりますってことで，30％だけ場合によっては変えさせて下さいと。西山さんも呑んだ。両者，納得せざるを得なかった（笑)」

今西 「政治的ですね（笑)」

上田 「僕も『これでいこうか』ということになりました。妥協って，いいかどうかわからないんですけど，僕は割と妥協主義なんです。それで二人の関

係はつながったんです。そして西山先生が前半をやったんです。西山さんが，そこで何をやるかということになって，僕に『広場をつくれ』と言われた。『先生，広場って日本にはありません。日本の伝統には』って，すると『なくてもつくれ』って言う（笑）。ところが，その広場を西山さんがわあわあ言うもんだから，関西財界から『西山は人民広場をつくろうとしている』と言われた（笑），新聞に出ちゃった。それで困っちゃった，私も」

今西 「天安門の前みたいな（笑）」

上田 「そうなんです。関西の財界人は，広場というたら天安門広場しかピンと来ない。それで困りましてね，そのころ僕は鎮守の森というのを調査していたんです。というのも，東京から京都へ赴任する時に新幹線が初めてできたんです，1964 年 10 月です。で，できたばかりの新幹線に乗って京都に行った。それで新幹線に乗ってみたら，旧幹線は海岸の方をトコトコ走っているけれども，新幹線は山の方をまっすぐに走っているからほとんど山野が見える。旧幹線は町々を通るから家ばっかり見えるけど，新幹線や野原ばかり。トンネルと野原。それで野原を見ているうちに，ポコッポコッと森があるのに気がついて『何やろか』と思ったら，それには鳥居があって，『ああ，これ鎮守の森や』と私は思ったんです。それまで私は建設省にいて，国土開発で国土を潰す仕事をやっていたのに，森が残っている，しかもそれが鎮守の森だ，神様がいるから森が残るんだと，僕はビックリしましてね。それで鎮守の森に興味を持って色々調べだして，あるとき小豆島のすごい鎮守の森のお祭りをやる時の舞台を見たんです」

今西 「農村歌舞伎ですね」

上田 「そう，農村歌舞伎。そういうのをやるものすごい舞台がある，石段の立体的な観客席と広場のギリシアの円形劇場みたいなもんです。それが 3 つも 4 つもあるんです。で，あれをやろうと，思ったので『お祭り広場』をやろうと提案して，それが通りました。ところが西山さんがあんまり『天安門広場をつくるんじゃないか，人民広場じゃないか』て言われるものだから，嫌になってやめちゃったんです。『丹下君との話はもうやめた。丹下君一人で

やってくれ，俺は降りる』しかしこれは後から考えると，共産党の方から相当プレッシャーがかかったようです。西山さんに。しょうがないから，私も降りました」

上田 「それでしばらく私は丹下さんや磯崎とも会わなかったんだけれども，やっぱり関西財界がグチャグチャ言い出してね，特に関西の建築界が。西山さんのところに強談判に来たんです，建築界のお歴々が。『西山さんが辞めるなら，せめて上田君だけでも残してくれ』って。で，西山さんが僕に『上田君，どうする。こんなこと言うてるけど』って。『私は自分の意志では決められません。どうぞ先生が決めて下さい』って言った。『わしはどうでもええ。お前，やりたければやれ』ということなので，『2～3日考えさせてください』って引き下がった。そして米田に相談したら，そのころ『ビワ湖博』というものをやっていたから，米田が『ビワ湖博よりましやろ』というもんだから引受けることにした。で，丹下さんに『私はお祭り広場を提案しましたので，お祭り広場の設計ならやらせていただきます』と言った。丹下さんは自分がお祭り広場をやろうと思っていたが『わかった』と言って，またそこで『君は下をやれ。僕は上をやる』と言うて，初め何のことかわからんかった（笑）」

今西 「ものすごい妥協ですね（笑）」

上田 「つまり，お祭り広場という広場の床があるじゃないですか，観覧席もあるじゃないですか。そこを『お前，上田がやれ』。それと大屋根があって『これは俺がやる』と。丹下さん独特の足して二で割るという。政治的というかすごいですよ，あの人は。それで『わかりました』と言って，やったわけです。これはもう最後までやりました。設計もやった。その時に計画学研究所という名前を都市科学研究所に変えたんです。そこでやった」

上田 「それで米田に，『いよいよ万博やることになったから』といって，手伝わせたんですよ。ですから，都市科学研究所で僕がやったのは，お祭り広場の下部ですね。所長は米田です」

今西 「それで，都市科学研究所はすごい急成長したのですか」

上田 「それでガーッと信用がついちゃったんです。万博やるってことで」

今西 「研究員だけで，一時は 100 人近くいた」

上田 「僕がいた時にはそこまでいってない。30 人くらいだったと思います。ところが，それで米田が万博計画を宣伝しまくったから，あちこちから注文が殺到したわけです。関西の企業はわけがわからない。万博で何をやるのかわからん。そのうちにあちこちにパビリオンが建つじゃないですか。その設計依頼が来たわけです。でも僕はお祭り広場以外のことは大学の教師だし，やらない。ただ，お祭り広場だけは提案した以上やる。だけど，それがガーッと膨れあがったんです。それで米田が，銀行からどんどん金を借りだしたんですよ，ものすごく。で，僕は『こんなん困る』と，これだと都市科学はつぶれる，と。でも米田は『潰れへんねん』と言う。『銀行は小さい企業は潰すけど，一億や二億の企業は潰すけど，20 億 30 億の企業は潰さへんねん』と借りまくったんです，銀行から。それで僕はしょうがないから『降りる』といった。実は研究所の株は大方僕が持ってたんです。でもそれを米田にやった，発行時の金額でね。そして僕は全部手を引いた。それが万博の行われる前年の 69 年の暮れぐらいでしたね。全部米田に譲りました」

今西 「榎並さんは最初から関わっていたんですか？」

上田 「榎並は都市調査会の理事長にしたんです。都市調査会というのは，近衛内閣の太平洋問題調査会から名を取りました。『米田が榎並を助けてくれ』ということがあったんで」

今西 「米田さんが社長で，榎並さんが相談役のような？」

上田 「榎並は…そうですね，都市科学研究所では顧問みたいな感じでいましたね。後になって，米田体制になってからは榎並も役職に就いたと思います」

今西 「ええ，専務でしたね」

上田 「はじめは顧問くらいだった。僕がいた頃は。事実上の社長は僕でした。だって株は大方僕が持ってたから。だから米田の首を切ろうと思えばできたんだけれども，僕はやりたくはなかった（苦笑）。争いたくなかったんです。妥協主義です」

今西 「榎並さんはだけど，都市論の本も書いてるし，割と学者的な要素も

あった人なんですか？」

上田 「学芸書林から出した『わが国土の設計』に書いてもらったのは僕です。彼は中岡哲郎などと一緒に，社会運動の懸賞論文に応募したりしてたじゃないですか。建築も都市も何も関係なかった。しかし文章は書ける。それが米田が榎並を何とかしてくれ，ということで」

今西 「三人で本をお書きになってますね」

上田 「で，『榎並を何とかしてくれ』いうから，都市評論家にしようということで，つくった本なんですよ。榎並と僕と，もう一人は僕の弟子の田端修と米田と」

今西 「『都市の生活空間』ですか」

上田 「いいえ。『わが国土の設計』というものです。僕が毎日新聞から頼まれて連載していたものをまとめたものです。その連載を本にまとめるという時に，榎並も米田も関係ないんだけども，米田は何とか榎並を評論家として売り出したいからということで，二人とも都市評論家として僕の論文のコメントを書いてくれたのがそれです。『わが国土の設計』は三一（書房）から出したんだったかな，いや，学芸書林です。三一には荒木がいたんですよ」

今西 「荒神橋事件で処分された荒木和夫さんですか？」

上田 「いや，処分はされていない。あれは僕の後に細胞キャップをやった男で，細胞キャップは原則的に表に出ないことになってますから…。松浦(玲)は突然議長になって表に出たんだけど，荒木はもう死んじゃったけど，荒木を三一書房に入れたんのも私です。あれの就職も考えてくれと言われてね。誰に頼まれたのかのかな？　榎並かな？」

今西 「彼は荒神橋で無期停学になってます」

上田 「無期停学になってるのですか？　細胞キャップなんですよ，僕の後の。細胞キャップは通常，表に出ない筈です」

今西 「松浦さんと荒木さんは，だけど同学会の代議員選挙で日本共産党公認候補と言うことで，立候補してるんです」

上田 「そしたら…，ごめんなさい。それが事実だったら，荒木は細胞キャッ

プを辞めてますね。誰かに代わっています。でも僕の後は荒木だったんです。その後で変わっているんでは？。何度も言うように，原則的に共産党員幹部は表に出さない。だから辞めた後でしょうね，誰がやっていたのか…池上惇かな？」

上田 「で，僕が建設省にいた時に，その荒木の就職も頼まれて，何かの時に三一の社長に会って，頼んで入れたんです。それで荒木は三一にいて，僕は建設省の役人の時代に『日本の住宅問題』という非合法出版をやったんです，ペンネームで，全部。それを荒木にやってもらった。当時の住宅政策の真っ向からの批判です。僕が入って，しばらくしてから今の政策はおかしいということになって，やっぱり左翼が多かったからですね」

今西 「当時の建設省や農林省は左翼が多いんですね」

上田 「我々のグループは５～６人でした。その連中が後に住宅局長になってます。あと建研（建築研究所）の所長とかもなっているけど。その連中と『日本の住宅問題』という本を出した。だってデータをみんな持ってますからね。日頃やっているから。だから，ものすごい批判を出したんです。それを出してくれたのが三一書房で，その時，荒木が絡んでくれた。そうですか。荒木も無期停になったんやなあ。彼もいい男です。革命家なんてタイプではない」

今西 「無期停学の処分をされてますね。だから，共産党がやっぱり狙いうちされてるんですね」

上田 「いや。法経第一教室の占拠などを実際にしたからでしょう。滝川幸辰はかつて弁護士もしていましたから，いい加減なことはしない。共産党員をやっつけるなら僕を処分しなければならなかったはずです」

今西 「それにしても都市科学研究所が，すごい急成長していって，100 人近い研究員がいたんですね」

上田 「それは私が辞めてから以後のことです。枠が外れてしまいましたから。米田たちが好きなようにやりましたから」

今西 「どんどん金を借りて」

上田 「拡大して，そして東京に進出して…」

今西 「日本で第3位の民間研究機関になった」

上田 「そうでしょうね。僕は一切関係していない。『やばい』と思ったから」

今西 「その時には手を引かれていたんですね？」

上田 「完全に引いちゃった。私が止めたので，私の教え子二人も止めました。株も先ほどいいましたように全部発行時の価格で売っちゃって。そのあと米田は，自分の恩師の経済学の教授連を顧問にしたりしたんです」

今西 「最後までお金を借りていたみたいですからね」

上田 「そうですか」

今西 「だから，今でも表に出てこれないわけでしょう。連絡を取ろうとしても，なかなか電話に出てくれないし，54歳の時から，ずっと逃亡生活のようなことを続けているわけでしょ」

上田 「ヤクザが追い回しているとかいう話を聞きました」

今西 「金を返せ，ということでね。ヤクザには時効はないですからね」

上田 「先生の中には，それを苦にして死んだ人もいるということです。米田の契約に保証人のハンコを押したせいでね，よくある話です。僕は，全部株を彼に渡しちゃって退いたから，ヤクザも来なかった」

今西 「関係ないですからね」

上田 「関係ない。だけど，僕の弟子の何人かかは残った，しかし弟子たちは従業員ですから，何もなかった。その連中があとでつくったのが，現在大阪にある総合計画研究所です。でもそのリーダーの近藤正広も死んじゃった。いい奴でした…」

8　1950年代の京都大学

今西 「榎並さんて，どういう人物だったんですか？」

上田 「榎並はね，神戸一中でラクビーをやってた。スポーツマンだったです。それがまあ，どういうわけか…三高で」

今西 「三高から京大ですね」

上田　「左傾化した。あんまり詳しくは知りませんが，榎並は当時，中心人物の一人でしたね。真面目な人情味のある男でした」

今西　「ああそうか，中岡哲郎さんとは三高がらみでの付き合いなんですね？」

上田　「そうかもわかりません。中岡はよく知りませんが，彼は文化人ですから。危険なことになるとやっぱり出てこないでしょう」

今西　「頭がいい人ですから」

上田　「頭はいいでしょう。彼は天皇事件のとき問題になった天皇にたいする公開質問状を執筆したのです。それが天皇事件になって大騒ぎになった途端，逃亡したときいている」

今西　「そうですね」

上田　「捕まったら死刑になると思ったようです」

今西　「恐怖のあまり学校にも行けなかった」

上田　「逃亡生活をした。だから，それに懲りてか，以降は余り過激なことはやってない」

今西　「いや。でも，構造改革派の運動はずっと」

上田　「いやあ『構革派』の問題も，色々ありました（笑）」

今西　「それこそ，飛鳥井雅道さん（日本近代史家，京大名誉教授，故人）とか松浦玲さんまで」

上田　「ああ，そうですね。わたしが京大細胞キャップで同学会の再建や学園復興会議をやったのも，いわばその『構革路線』です。当時はそれで共産党からパージされた。その後，榎並なんかも構造改革に走った」

今西　「榎並さんもそうですね。榎並さんはむしろ，そこから社会党に行ってしまったわけでしょ？　あとで，社会党人脈も使ったわけでしょ」

上田　「そうですね。しかし，よく調べられましたね（笑）」

今西　「いえいえ，そんなことないですけど（笑）。まだこれからなんですけど」

上田　「もう，大方そういう人物は死んでいる。もうあんまり資料が残ってな

いから大変ですね」

今西 「いやまあ，でも割と，色々な資料が，出てきますけど。小さなパンフレット類がね，結構面白いんですよね。同学会関係でパンフレットを色々ありましてね。天皇事件で処分された中心は，青木宏（元会社役員，故人）さん，同学会委員長で，経済学部の人ですね」

上田 「そうです」

今西 「それから，小畑哲雄さんという文学部の人もいます」

上田 「小畑はいつも調子がいいけれども，詩人でようしゃべる男ですが組織マンじゃない。アジテーターですね」

今西 「武田正博さんていう農学部の人」

上田 「ああ，頑丈な男でしたね」

今西 「で，内山一雄さんっていうのが教育(学部)ですかね。倉野昌夫さん，古池健吉さん，玉井仁さん，秋本恒生さん。この 8 名が天皇事件で処分された方ですね。青木さんも亡くなってしまって」

上田 「田舎から出て京大に入って，急に中執をやらされて，わけがわからないうちに停学になって，もう故郷（くに）にも帰れなかったですよ，たいていみんな」

今西 「そうですね」

上田 「国に帰ったら，天皇事件をやった極悪人」

今西 「そうでしょうね。当時ではね」

上田 「綿々と，今でも窮状を訴えてますよ，そのうちの何人かは」

今西 「いや，なかには母子家庭でお母さんが『非国民』扱いされて。で，服部学長が丹後まで行って『代表として処分したのであって，この人が別に悪かった訳じゃない』という話をしているわけです，当時ね」

上田 「そうですか」

今西 「それぐらい，当時としては不敬罪はなくなったけども，実際は大事件ですからね。…後藤正治さんは当然，先生のところへ聞き取りに行ったと思ったんですけど」

上田 「全然来ていないです」

今西 「じゃあ，米田さんの情報だけで，やっているのかな？」

上田 「いや，米田の情報だけでやれないですよ，これは」

今西 「やれないですよね（笑），確かに。でも榎並さんの追悼会に出たって書いてあるんですよね。その時に先生とか，中岡さんに会っているはずなんですけどね。最後のところでね。中岡先生はこの前聞き取りをやりましてね（「『京大天皇事件』から技術史家へ」『アリーナ』11 号，2011 年）。これは校正前なんで，校正したらもちろんお送りしますけどね」

上田 「ああ，そうですか。松浦にも会うといわれましたね」

今西 「ええ」

上田 「彼とはそれから会ってないんだけど，どうしてますか？　勝海舟という」

今西 「もう，大変な力作です」

上田 「僕もあれを買って読んだ，と言っといて下さい」

今西 「ええ。松浦さんは，だから結局，処分されたでしょ？　で，現代史の松尾尊兊さん（京大名誉教授）のように，文学部の指導教官の小葉田淳さん（日本近世史家，故人）なんかが，もし処分を止めてくれろいに学長たちに言いに行っていたら，放学処分にはならなかっただろうというふうに言う人もいますね」

上田 「松浦？　小葉田が誰に？」

今西 「ええ。だから指導教官の小葉田さんが学長たちにです。もうちょっと軽い処分になったのではと。放学まではいかない，と」

上田 「そうですね」

今西 「だから，松浦さんは立命に行かれて，奈良本さんのところへ行ったでしょ？　だけど立命では以前からいた師岡祐行さん（元京都部落史研究所所長，故人）とか，そんな人たちとあまり合わなくて，どっちか言うとはずされたわけですよね。で京都市史（編纂室）の方に行かれて，奈良本さんたちと対立して，結局辞めてしまうわけです。後は筆一本で生活されて。桃山学

院大学に行くけど，桃山も辞めてしまって。ほとんど文筆活動でしょ？」

上田 「そうでしょうね」

今西 「だから，松尾尊兊さんに言わせると『無年金生活者』やからね。原稿料だけで生活されたのですね」

上田 「大変だよね，原稿だけで暮らすっていうのは。しかし彼は真面目な男ですからね。よくやっています」

今西 「そりゃ，そうですよ」

上田 「そうですねえ。放学というのはきつい処分ですからね」

今西 「他の国立大学も受けられないんですからね」

上田 「（放学は）あんまりやらないはずなんだけど。だから何で松浦が放学になったのか。ただ法経第一教室で議長をやっただけなんだけど」

今西 「大したことをやってないでしょ？　松浦さんは」

上田 「そうです。議長はやらされたんです」

今西 「あとで器物破損とか色々とくっつけられたらしいですけどね。そんなビラやぶる人は一杯いますからね（笑）」

上田 「だからあの時の黒幕は荒木だとばかり思っていたけど，荒木が表にでていたのなら誰がやったのか，米田がやったか，小山がやったのか。裏で誰かが方針を出したはずです。それがいわば元凶ですけどね。大概は，共産党の命令のままにやっているだけで，その裏に指令した奴がいるんだけど，指令した奴には絶対に罪が行かないようにしてあるんです」

今西 「当時，地区委員会からも指導が来ているはずでしょ？」

上田 「来てますけども，やはり細胞キャップが中心になります。最終判断はキャップがやりますからね。もしやらなかったら除名されるかもわかりません。だからその時の京大共産党のキャップの問題ですね」

今西 「じゃあ，松浦さんに聞いてみます（笑）」

上田 「誰だったか聞いてみてください。僕は荒木とばかり思っていたけど…」

今西 「キャップは代議員にもならせないのですか」

上田　「ならせない。だってキャップをやられたら組織が麻痺しちゃうもの。だから誰が松浦にやれといったのかが，一番の中心はですね，小山かなあと思うんだけど，小山はＹだったし。僕に『府学連に行くか，職業革命家になるか』と言ったのは先のように米田です。それは米田が地区委員ないし府委員だったからでしょう。そんなことは，僕より上の人間じゃないといえないんです。私は京大のキャップだったから僕の下の連中が言うはずがない」

今西　「まあ，聞いていいのかどうか，わかりませんけど，どれくらいいたんですか，京大の細胞は？」

上田　「まあ，時期によって違いますけど，多い時は 100 人ぐらいいたでしょうね。少ない時には 30 人とか 40 人。だけど事実上，眠っている党員が多いのです。それを入れるともっと多い」

今西　「休眠党員ってやつですね」

上田　「休眠です。休眠を含めたら 150 人くらいいたかもわかりませんが，実際に活動しているのはその半分くらいだったでしょうね」

今西　「京大細胞のキャップというのは，当時教職員にも命令できたわけですか？」

上田　「形式的にはそうです。しかし職員細胞は学生細胞と一緒になりたがらないから，実際は地区委員会から指導に来ますね」

今西　「それもまた，組織としてすごいですね。京大は主流派でしょ？」

上田　「もちろん」

今西　「教員たちの組織もわりと，経済なんかは最初国際派がいたんだけれども，みんな転向して主流派に変わったとかいう話ですね。最後まで抵抗したのは堀江英一さん（経済史家，故人）だけだったという（笑）」

上田　「ああ，そうですか（苦笑）。そうだったかもわかりません。まあ，文系の中では大問題だったでしょうね。基本的には労農派と講座派の流れを継いでいるから」

今西　「そうですね。…堀江さんなんか後に講座派批判に変わりますからね」

上田　「そうですか。我々はもう単純に『戦争反対！』てことでやっていたけ

れど，文系はやっぱり理論闘争ですね」

今西 「原爆展は参加しておられないんですか？」

上田 「してないです」

今西 「でも，原爆展って長く続きますよね？」

上田 「続きます。だけど本当は僕は学生運動で政治運動はやりたくなかったんですよ」

今西 「小松左京さんとの関係はいつ頃からなんですか？」

上田 「小松は大学時代にデモで一緒になったくらいで，あまり関係はなかった。文学部だしね。あまり」

今西 「卒業後なんですか？」

上田 「卒業後です」

今西 「万博とかあのへんは関係していたんでしょ？」

上田 「万博には関係しました。彼は梅棹忠夫，東京の美術評論家の川添登，社会学者の加藤秀俊，その 4 人とやっていました。『万博を考える会』というのをつくっていたんです」

今西 「川添さんも早稲田のレッド・パージ反対闘争の時の活動家だったんですけどね」

上田 「そうでしょうね。彼はまだ元気です。最近会いました」

今西 「ええ，本を書いておられるみたいですね。で，…井上章一さん（国際日本文化研究センター教授）とかは，先生のお弟子さんなんですか？」

上田 「（笑）。ああ一応，弟子ですね」

今西 「橋爪紳也さん（大阪府立大学特別教授）なんかも」

上田 「そうです。『大阪市の選挙なんか出るな！』て言うたんやけど。言うことときかんですよ，もう」

今西 「橋爪さんは，だけど先生を慕って京大の院を辞めて阪大へ行ったんじゃないですか」

上田 「アイツは高津なんですよ。高津で私の後輩です。それが何か知らんけど建築に来て，僕が阪大に行ったら阪大に来たんです。ついてきた。だから

ドクターは阪大なんです。僕が見た。京都精華大にもきた。そして選挙なんかに出る」

今西　「また大学に戻れたじゃないですか，一応。でも（政治が）すごい好きらしいですね。彼は授業で『俺が市長になったら，こうする』という話を延々とするとか」

上田　「今西さんは今北海道におられるけど,長いこと関西におられたんですか？」

今西　「42 歳まで関西ですね」

上田　「北海道には何年くらい」

今西　「もう今年で 20 年です」

上田　「ああ，そんなになるのか。それにしても…。関西のことお詳しい」

今西　「ええ，だからもう，友達は関西に一杯いますし。しゃべりかたも関西弁ですね（笑）。では，今日は，本当に興味深いお話を有難うございました」

注

(1)　11 月 11 日の荒神橋事件の時の学長は服部峻治郎氏（故人）である。ただし，12 月の処分撤回闘争の時には，滝川氏に交代している。

(2)　大島渚氏の京大法学部での指導教官は，猪木正道氏（故人）である。大島渚『大島渚　大島渚 1960』（日本図書センター，2001 年）参照。